

福祉系

対人援助職養成の

現場から 52

西川 友理

保育士の「不適切な保育」報道

保育士が園で行った保育のあり方をめぐり、特に近年、様々な事件がニュース番組をにぎわしています。送迎バスに子どもを置き去りにした、保育士が子どもの足を持ってさかさまに吊るした、乳児の頬っぺたを引っ張った、子どもの顔に落書きをした……いわゆる「不適切な保育」と呼ばれるものです。

「ちいさな子どもに何てことをするん

だ！」

「専門職として自覚が足りないのではないか！」

連日ワイドショーでも犯人である保育士が批判される日々が続きました。

報道を受けて、現場の人は…

しかし、私自身が直接お話した保育現場の先生方は、どちらかというところの「犯人」

たちを批判する気になれない、という人が多い印象を持っています。

「うーん、何があったんやろね。」

「何が起こったのか、その前後を知りたいなあ……。」

「そらまあ、足首持って逆さにつるすとか、絶対やったらあかんことしてる、ってのはわかる、わかるけど……。」

「うん、行動によっては、この一場面だけ取り上げても仕方ない気がするよね。文脈がわからないと、何とも言えないと思う。」

という人が多いです。

さらには

「明日は我が身、って思うわ……。」

「絶対に不適切な保育なんてしない！って思っているけど、でも、不適切をしない、そういう事態は起こらない、とは言い切れないよね。誰もががついうっかり、見落とししてしまう可能性はあるんだし……。」

「いろいろと気を付けていても、けがをしたり、思わぬことで傷つけてしまったりするもんね……」

という人もいます。

厚生労働省の調査

昨年末から今年2月にかけて、「不適切保育の実態把握」という形で各園に厚生労働省から調査が来ました。ある園長先生が教えてくださったことによると、「直近1年間で何件の不適切保育がありましたか」というものを問うものであったとのこと。なにをどう不適切保育と考えたらいいのか、どんな対応を不適切と考えるのか、なにがあったら「1件」と数えることになるのか

……。

「何を書けっていうんだろって。途方に暮れちゃったよ。」

とおっしゃっていました

そんな報道があってひと月もしないうちに、やってきたのです、あの季節が。

2月、節分の季節。

「ねえ、今年はどうする?!」

「鬼は出す?」

「節分に鬼出さないで何出すのよ。」

「いやー、出すとしてもさ、どうやって出す?」

「鬼はマスクをする?大声出すんならコロナ対策のことを考えても、しなきゃいけないよね。」

「お面でマスクになるんじゃないの?」

1月下旬は保育・幼児教育現場の先生から、そんなお話をよく聞きました。

なにせ、あちこちで「不適切な保育」が話題になっている時期です。

節分と言えば、怖い鬼が襲って来て、そいつから逃げ回りながら、豆まきをして、やっつける、というのがセオリーです。一歩踏み外せば「不適切な保育」と言われかねない関わり方を、積極的に園を挙げて行うというなかなかきわどい行事です。

ある自治体では、運営主体が公立か私立かに関わらず、1月中に「今年は豆まき禁止」の通達が来たと言います。去年まではやっていたのに……。

さらにある園では「うちはキリスト教系だからキリスト教系じゃない宗教行事はし

ないことになったのよ」とのこと。節分って宗教行事でしたっけ…うーん、まあ、広い意味ではそうになる、かな？

その他、今年は特に多くの園が頭をひねって「不適切でない節分行事」を考えられたようです。

“不適切な保育”か、否か。

でも、そうやって考えた保育が、果たして適切な保育なのか、不適切な保育なのか、誰がどんな風に判断するのでしょうか。

子どもが泣いたら、悲しい思いや怖い思いをしたら不適切でしょうか。子どもが笑っていれば、それでいい保育でしょうか。トラブルのもとになるかもしれないからと言って、伝統行事を取りやめることが、子ども達の豊かな保育環境を保障することになるのでしょうか。ただただ子どもが泣いて怖がって逃げ出し、これも経験という、その経験はどういう意味があるのでしょうか。それを見ている大人はみな、可愛いと言って笑う。それは適切な保育でしょうか。その他諸々、どう考えたらいいのでしょうか。

…というか、そもそも“不適切な保育”って、何なのでしょう。節分行事をする想定して、「不適切な保育」とは何かを考えてみます。

不適切な保育ってどんな保育？

不適切な保育とは何か。誰から見て、どの時点で、どんなふうに不適切なのか。これについて、実は定義された文書がありません。

厚生労働省の令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業として出された株式会社キャンサーズキャンの『不適切な保育に関する対応について 事業報告書』によると、不適切な保育とは「保育所での保育士等による子どもへの関わりについて、保育所保育指針に示す子どもの人権・人格の尊重の観点に照らし、改善を要すると判断される行為」とされています。

同報告書では、不適切な保育の行為類型として、以下の5つを挙げています。

- ① 子ども一人一人の人格を尊重しない関わり
- ② 物事を強要するような関わり・脅迫的な言葉がけ
- ③ 罰を与える・乱暴な関わり
- ④ 子ども一人一人の育ちや家庭環境への配慮に欠ける関わり
- ⑤ 差別的な関わり

…なるほど、確かにこれらは不適切です。でも、これらは皆抽象的で、具体的に現場で起きていることをこの類型に当てはめるのも難しそう。

節分はまさに難しいところです。「④子ども一人一人の育ち」を考えた時に伝統文化である豆まきや節分を伝えるということは大切でしょう、しかし「②脅迫的な言葉がけ」がよろしくないと言われても、節分の主役である鬼は基本的に「怖がられてなんぼ」の存在です。皆の前に現れただけで「③乱暴な関わり」であるといえ、まあそういうことになるでしょう。うーん、鬼さんはどういう意味を持つ存在で、保育現場にどういう形で出るか、その意味をまず考えないといけなそうです。

なぜ不適切な保育が生じるのか

同報告書では、「不適切な保育」が生じる背景として「“保育士一人一人の認識”の問題（子どもの人権や人格尊重の観点に照らして、どのような子どもへの関わり方が適切なのか十分に理解していない）」と、「“職場環境”の問題（施設における職員体制が十分でないなど、適切でない保育を誘発する状況が生じている）」のが2つを挙げています。

確かに、自分が良いと考えている保育や子どもとの接し方を「不適切」と考える人もいます。それは知識不足や認識不足ということもあるでしょうし、さらには価値観の違いで「不適切」とされることもあると考えられます。

また、疲れていたり、焦っていたり、忙しかったりといった理由で、いつもならない接し方をする可能性も考えられます。確かに、それらが整っていない園では不適切な保育も生じやすいでしょう。

でもちょっと待って、と立ち止まります。このような「保育士の認識不足」や「職場環境」が不適切な保育の要因だとすれば、どうすれば適切な節分の保育が出来るだろうか、と園の職員皆で頭をひねって話し合っている時点で、それはもう「不適切な保育」からは距離を置く環境になっているのではないのでしょうか。むしろ「この接し方や保育が正しい」と思い込む保育よりは、「不適切ではないか」と疑いながら、人権や人格の尊重に繋がる保育ってどんなふうになればいいのだろうか、と考えることが

大切です。子どもの人権や人格に配慮すること、職場環境をよくすること、それらはもう当然のものとして、その上で、「不適切な保育にならないように」対策を講じていらっしゃる現場は沢山あります。

「不適切にならないように」と 「不適切と言われないように」

今回様々なエピソードを耳にしたのですが、そこで伺った「対策方法」は、大きく分けて二分されていたように感じました。1つは「不適切でない保育になるような」対策方法、もう1つは「不適切な保育と“言われないように”するための」対策方法です。そして、現在の騒動の中で節分を実施した園の先生方は、その多くが前者です。

「うちはこういう考えで、こういうことを大事にしたいから、こういう節分をした」ということを伝えてくださいます。そこには「不適切って言われないかな」「周りからどう評価されるだろうか」ということが中心なのではなく、「うちはこういう考えで保育をするんだ」という、いわゆる保育現場で言うところの「ねらい」を大切にしている園の姿がありました。保育としてどういう意味や面白さをもって節分という行事をおこなうのか、園の先生方が自覚していて、そしてそれらをしっかり関係職員が皆で共有していらっしゃる姿です。

周囲から何と評価されるか、まったく気にしていないというわけではありません。地域の中の一員として地域の理解を得る事、子どもを預かる身としてその子どもの保護者の理解を得ることは当然大切なことです。しかし、もし何かあっても、きちんと自分

たちの姿勢として提示でき、さらには話し合っていこうとされる、そういう先生方の姿勢こそが、その園に対する信頼を生み、さらにはその園自身の自信につながるものになると強く感じました。

また、そのような先生方の園は、そもそも普段から保護者や地域の人々と話し合いを密にし、園の姿勢を理解し合って、ともに子ども達の生活を作り上げていく意識が強いところであるように感じています。

というわけで、くだんの2月3日。

各園、実際にはどのように節分を過ごしたのでしょうか。

現場の先生に伺った話と、現場の先生が「知り合いの園ではね……」と語ってくれたものと、ネット検索で見つけた話を織り交ぜてざっと挙げると、

「例年は走って逃げる園児を追い掛け回す鬼、だったのが、ゆっくり歩いて近づく鬼、そして早めに『バスのおじさんでしたー』と正体をさらす」

「いつもは子どもを捕まえていたけど、今年子どもと距離をとる。一種のソーシャルディスタンス。」

「鬼さんを知ろう！ということで、年長さんが鬼さんへインタビュー、それを園児皆で見学」

「みんなとお友達になりたいと泣いている鬼を慰めて一緒に遊ぶ」

「子どもを連れて行こうとする鬼に先生が『この子はこれこれこういう良さがあるんです！悪い子じゃありません！』『その子はまた別のいいところがあるんです！』と説得し、子ども褒め褒め大会に

して、鬼はなんとなく納得して帰っていく。」

「心の鬼をやっつけよう！というお話と豆まきで、リアル鬼は登場させない」

「ひいらぎといわしの頭のお話をして、風邪やコロナという鬼をやっつけよう、という、伝統をしっかりと伝えることを中心に展開」

などなど、各園色々と頭をひねって、工夫をされて実施されたようです。

「節分行事」に対する評価

さらにインターネット等でいろいろ調べてみると、園で節分をすることについて、様々に創意工夫を凝らした園の取り組みがあったにもかかわらず、

「純粋な子どもに“鬼”という存在を教えた。」

「豆まきという食べ物を人に投げつける行為を教えた。」

「節分は鬼が園に来るだろうから休むと子どもがぐずっている。」

「節分のせいで夜泣きが2日ほどあった。園はどう考えているのか。」

「園では節分がなかったと聞いている。きちんと怖いものを教えることも大切なのではないか。」

「心の鬼をやっつける、だなんて、自分の中に悪いところがあると伝えるのは間違っているのではないか。」

等、全国では様々な意見が保護者から上がったこともあったようです。

あくまでもインターネットから拾い上げてきた結果で、情報の正確性や信ぴょう性は保証できずで、申し訳ありません。でも、

「そういう声が少なからずあった」ということです。

つまり、何をどうしたって、不安を持ったり、不適切と感じたりする人はいるようなのです。

それはもう、感じ方は人それぞれですから、仕方のないことです。不安や不適切を感じる人とは、また一緒にこのことについて話し合っていく関係性が始まる事でしょう。そうやって「よりよい保育」を考えていく道が少しずつできていくと思うのです。

不適切な保育を「どう排除するか」より 「どう付き合っていくか」

ある園の先生がおっしゃいました
「そもそも不適切を徹底排除して、この不条理な社会に子どもを出すのって、いいのかしら。適切も不適切もある世の中で、そういう不適切について同僚や上司や子どもと一緒に考える、一緒に乗り越える……保育の中で出会った不適切を、排除するとか、叩き潰す、という考えじゃなくて、不適切とどう付き合っていくのか皆で考える、っていう姿勢こそが、大事なんじゃないかしら。」

こんなふうに考える先生が、人権に対する意識、環境を整える意識がないということとは考えにくいと思うのですが、いかがでしょうか。

養成校として

残念ながら今年度私が担当した授業はもうすべて終わってしまいました。しかし、

来年度はこの一連のあらゆる園の試行錯誤を、学生に伝える授業をしようと思っています。

「これが不適切でない保育だ」と自信満々で動く姿よりも、悩みながら、「これが適切な保育じゃないかなあ」と考え続ける姿勢、それこそがプロとしての在り方ではないかと、私は考えるからです。

そして学生に「あなたなら、どんな節分をする？」と問いかけてみたいと思っています。

.....

参考文献：

- 「〈特報〉不適切保育 全国調査も実態把握は「困難」」2022年12月15日 産経新聞
- 令和2年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「不適切保育に関する対応について」事業報告書（別添）「不適切な保育の未然防止及び発生時の対応についての 手引き」2021年3月株式会社キャンサーズキャン 厚生労働省